

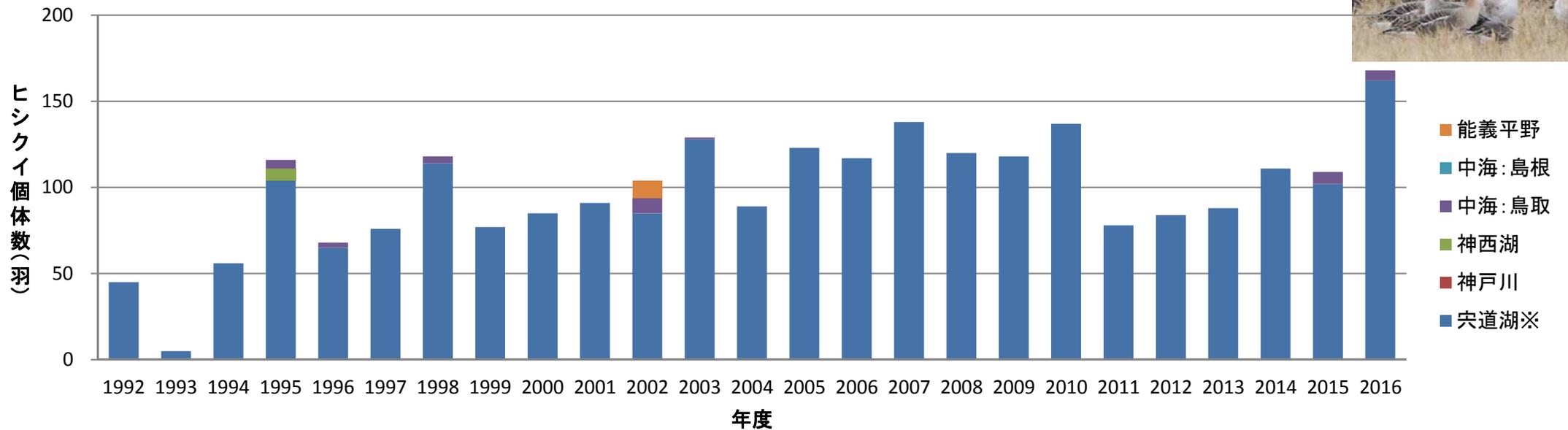
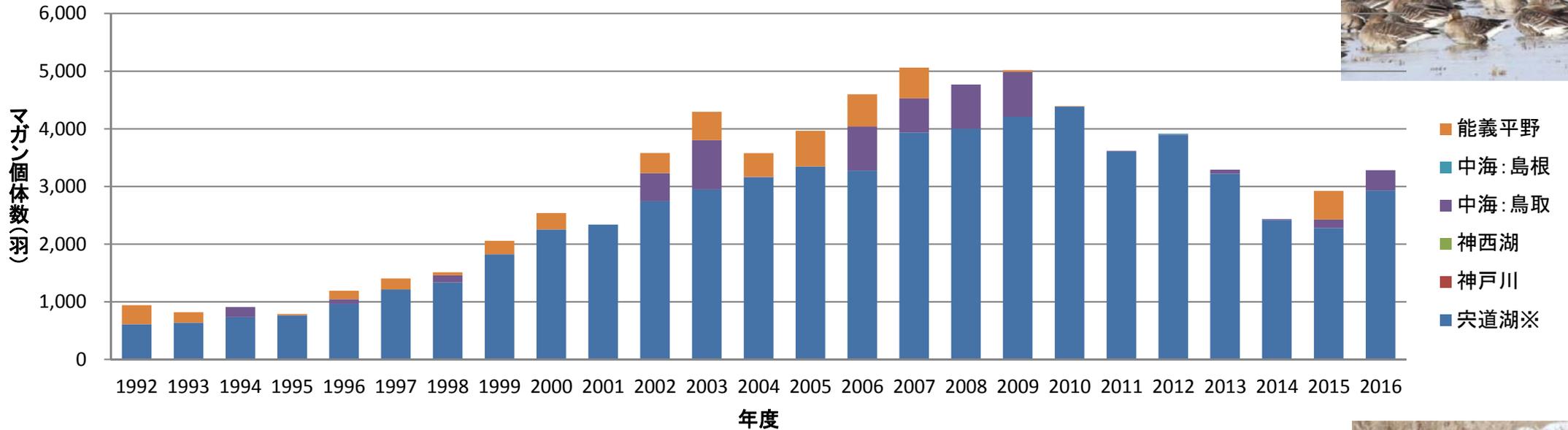
大型水鳥類の飛来状況について

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会
地域づくり部会 雲南圏域ワーキング

p9、p11については、生物保護の観点から削除しています。

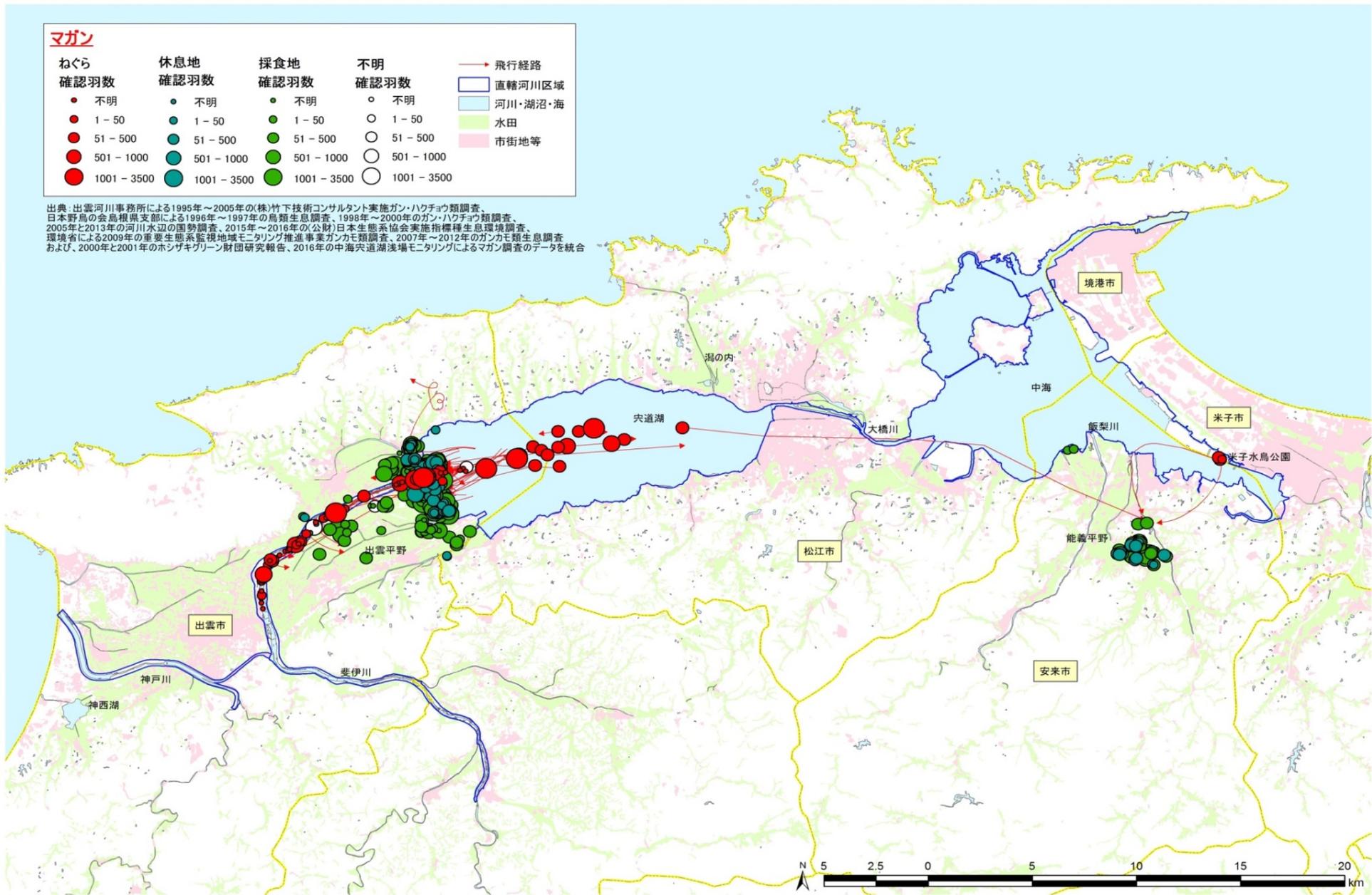
指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(1) ガン類の飛来状況



指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

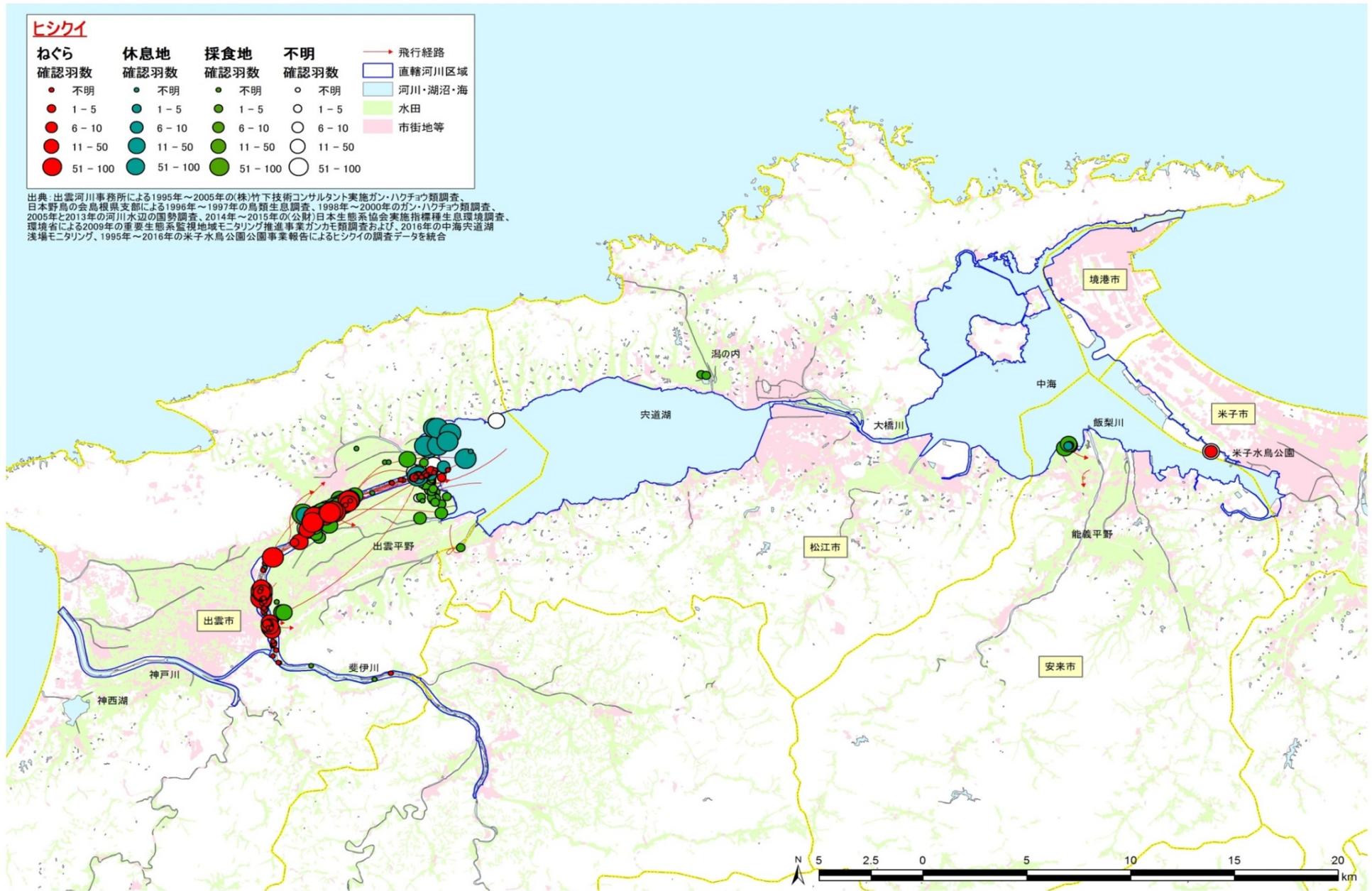
(1) ガン類の飛来状況 - マガンの飛来状況



- ・西部では穴道湖西岸の利用が最も多く、ねぐら、休息地、採食地として利用している。
- ・東部では水鳥公園をねぐらとし、能義平野を採食地、休息地として利用している。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

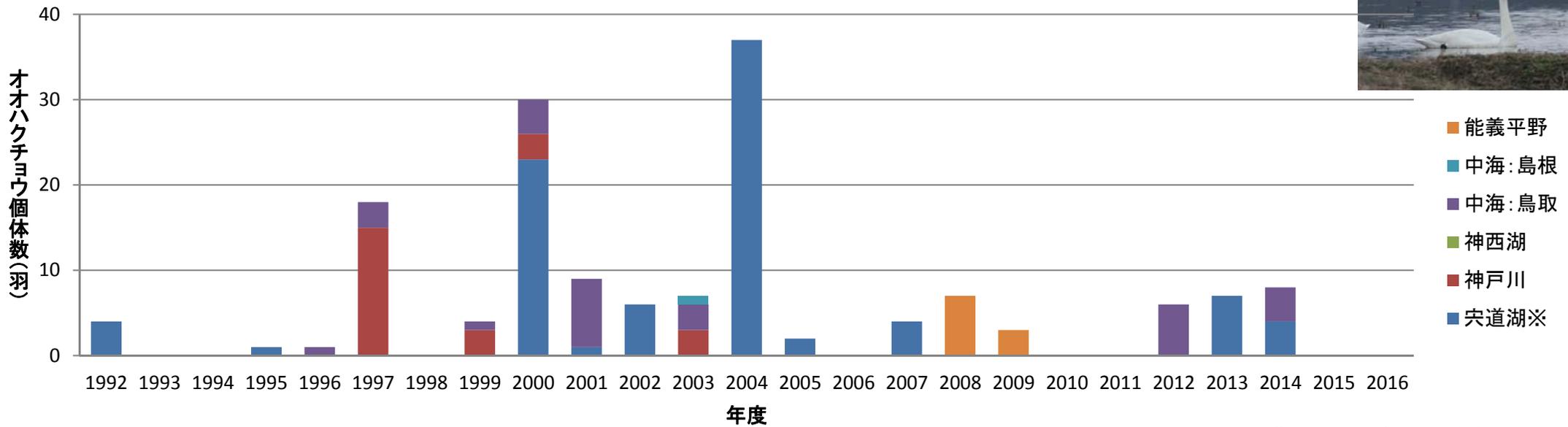
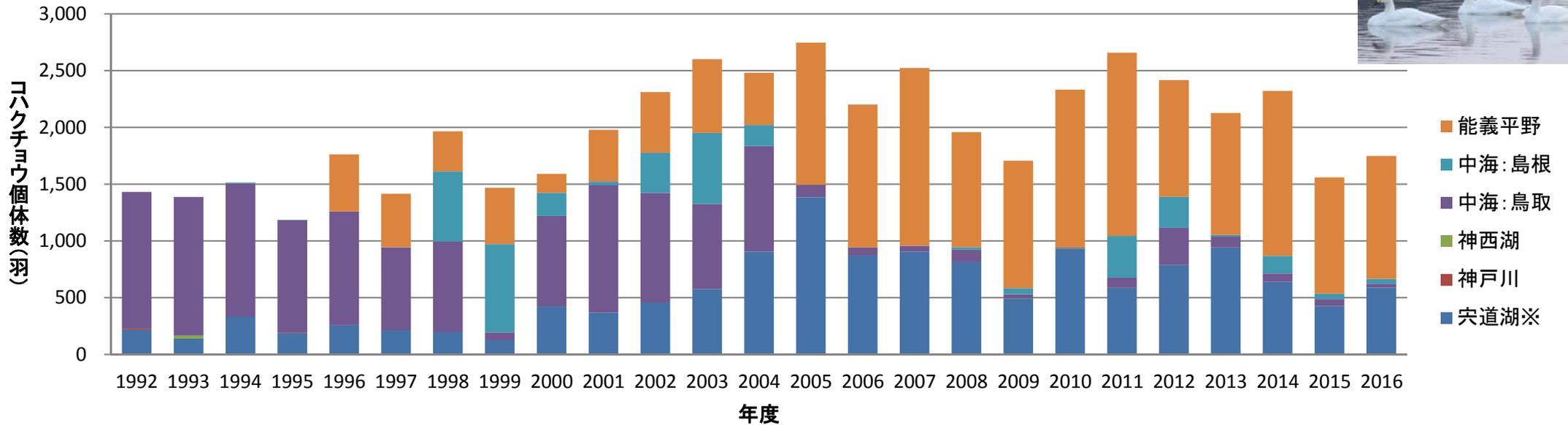
(1) ガン類の飛来状況 - ヒシクイの飛来状況



- ・斐伊川本川を主にねぐらとし、斐伊川の周辺を採食地として利用している。
- ・米子水鳥公園や飯梨川周辺も利用している記録がある。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(2) ハクチョウ類の飛来状況

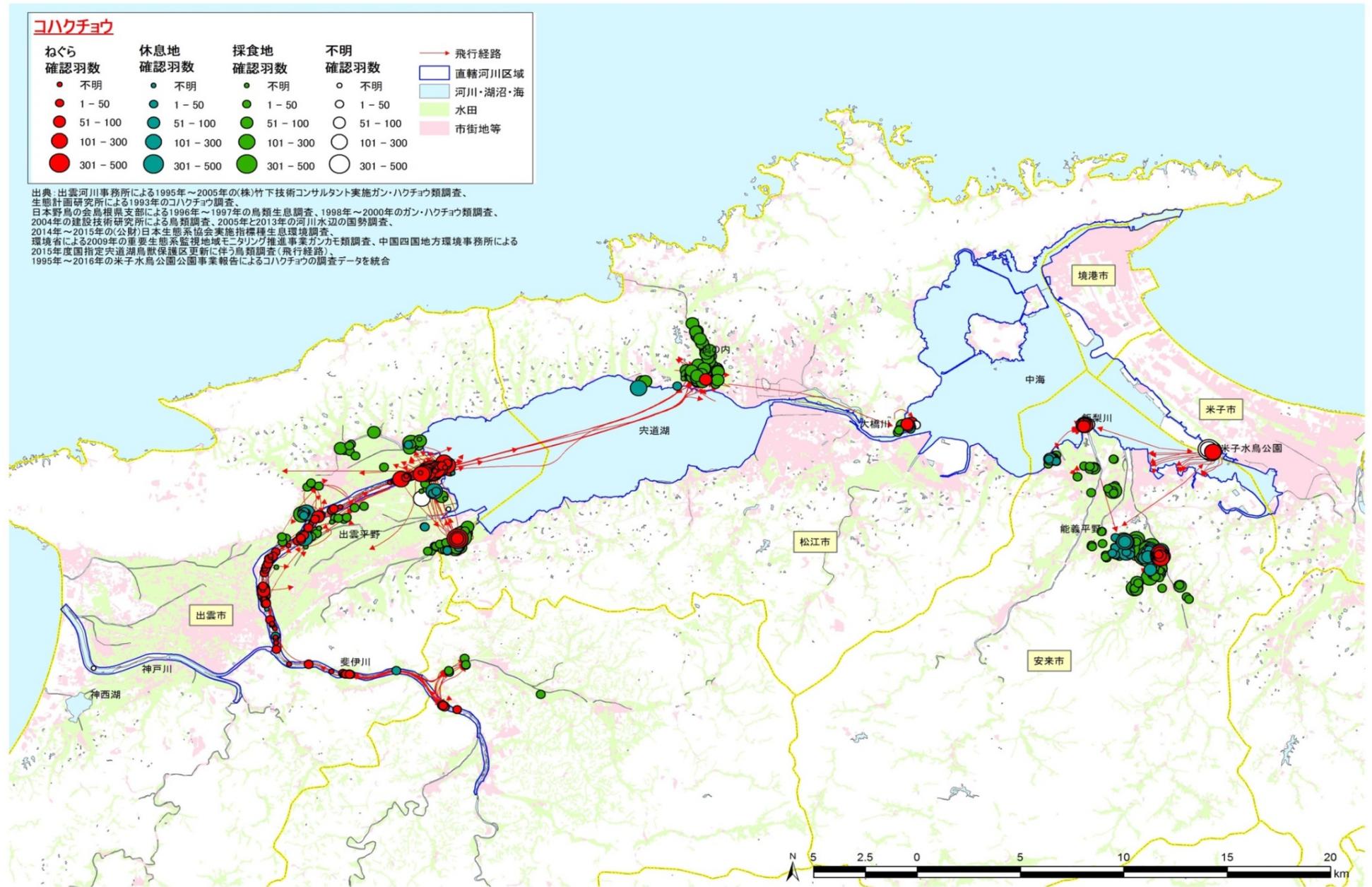


※ 斐伊川および潟の内も含む

出典: ガンカモ類生息調査(環境省)より

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

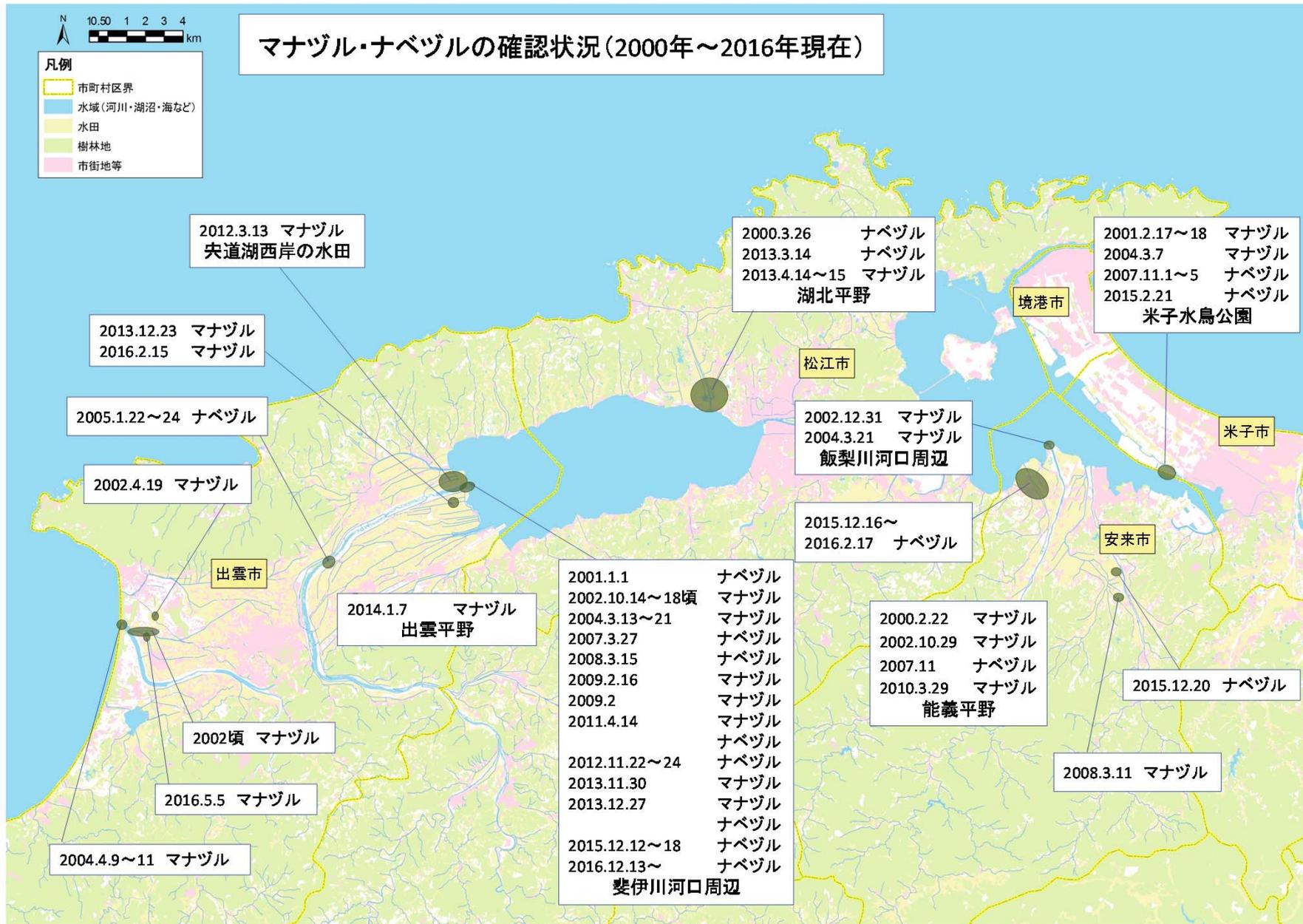
(2)ハクチョウ類の飛来状況 - コハクチョウの飛来状況



- ・西部では斐伊川本川を主にねぐらとし、斐伊川周辺、潟の内を採食地として利用している。
- ・東部では米子水鳥公園を主なねぐらとし、能義平野を主な採食地としている。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(3) ナベヅル・マナヅルの飛来状況



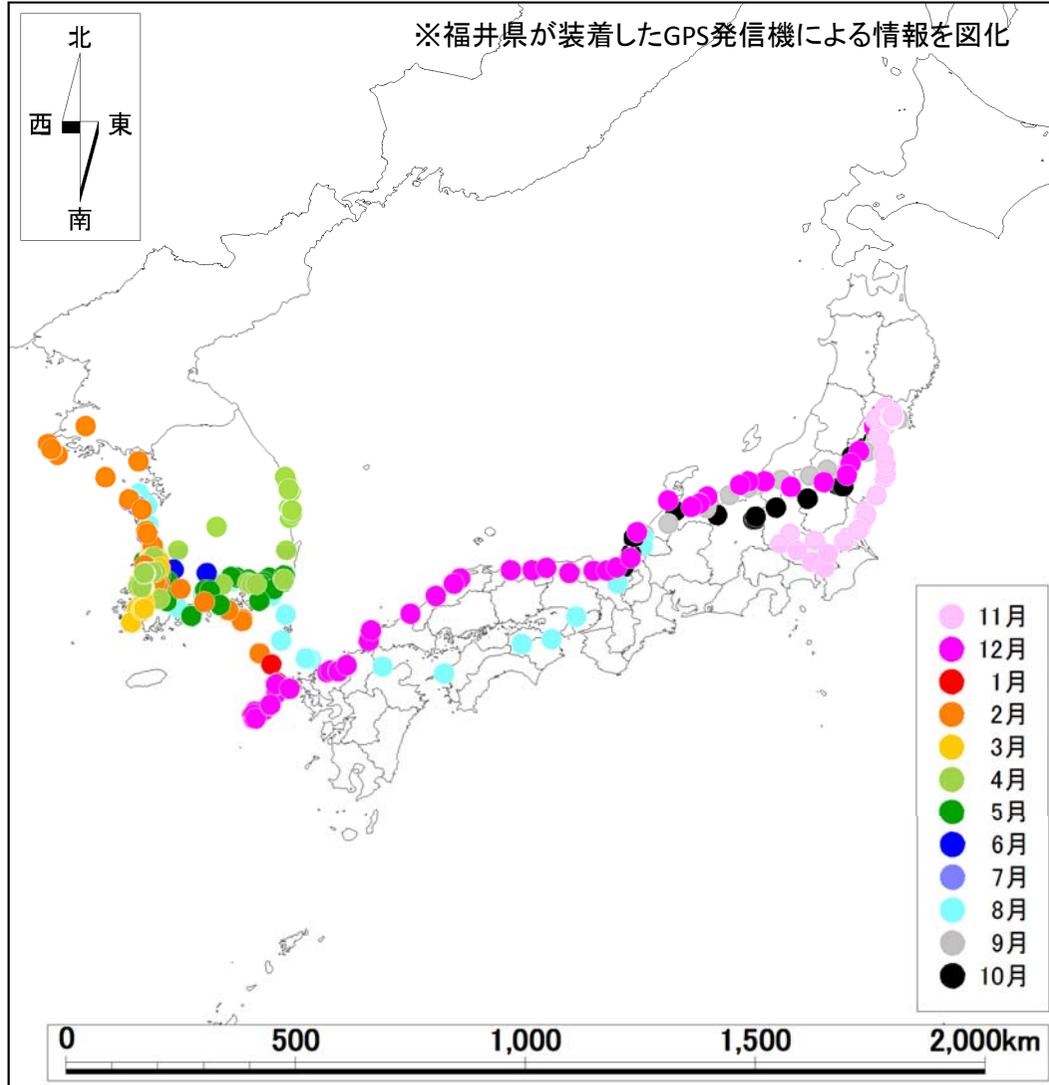
- ・確認数は多くないが、宍道湖西岸、潟の内、能義平野などで確認されている。
- ・2016年はこれまでに最も多い15羽のナベヅルの越冬が確認されている。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

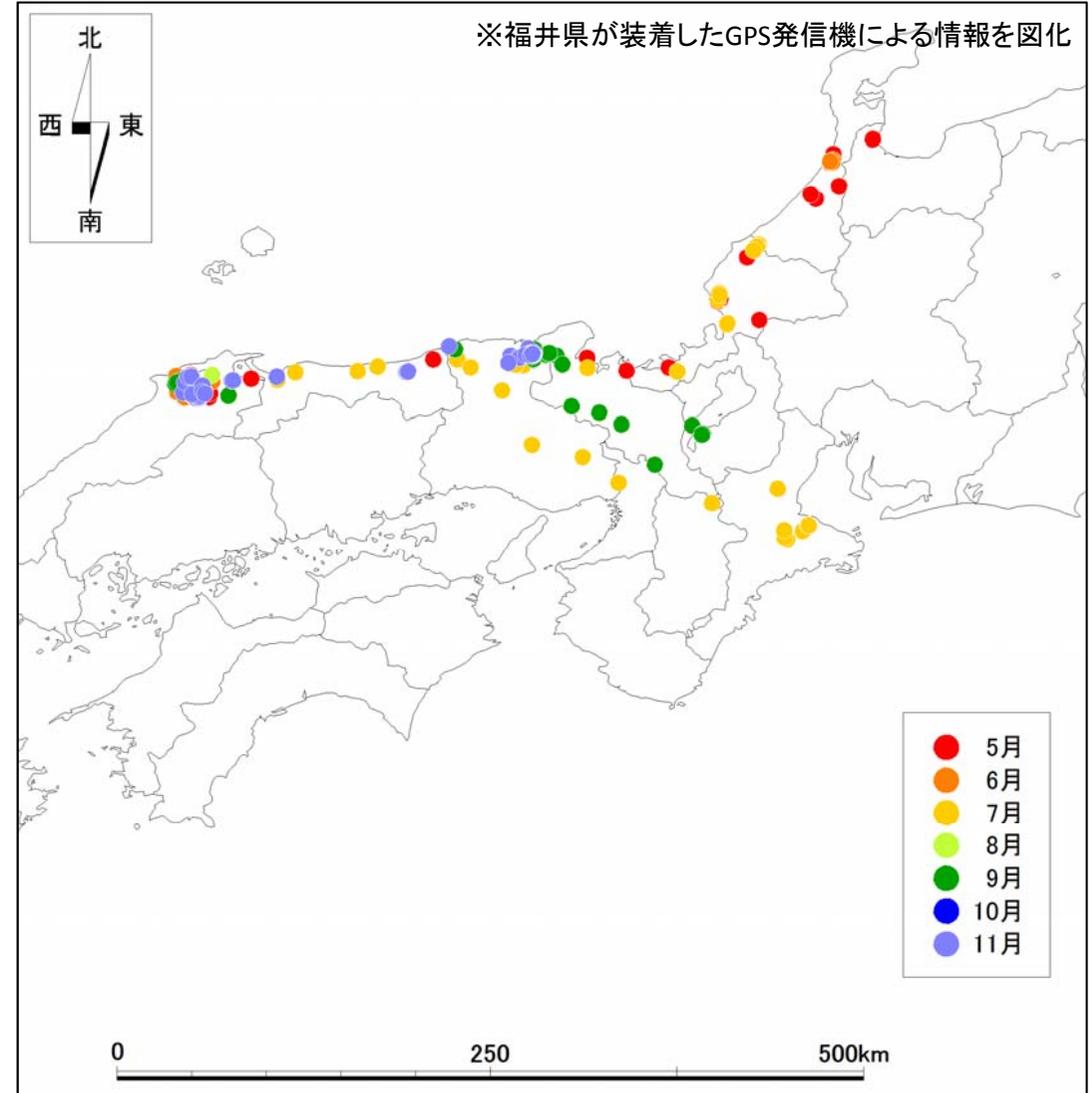
(4) コウノトリの飛来状況

コウノトリ調査結果概要

・げんきくんの行動位置



行動位置(2015年11月～2016年10月)



行動位置(ひな回収後)

- ・2016年11月に雲南市に飛来するまで、東は宮城から西は朝鮮半島まで広範囲に行動していた。
- ・ひな回収後は京都府京丹後市、兵庫県豊岡市で多く確認され、11月9日ごろに雲南市に飛来した。

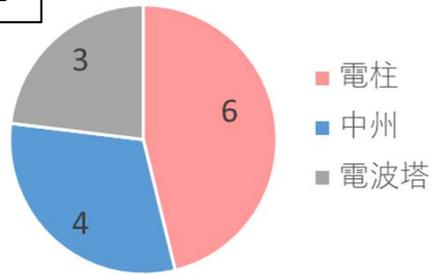
指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(4) コウノトリの飛来状況

コウノトリ調査結果概要

・ねぐらの確認状況

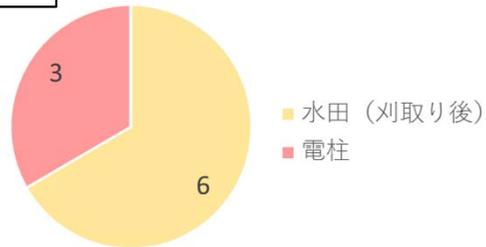
9月



ねぐら環境の内訳(2017年9月6~8日)



12月



ねぐら環境の内訳(2017年12月1~3日)



9月調査での主要なねぐらは電柱、中州、電波塔であった。

12月調査では電柱だけでなく、水田(刈取り後)をねぐらとする個体も確認された。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

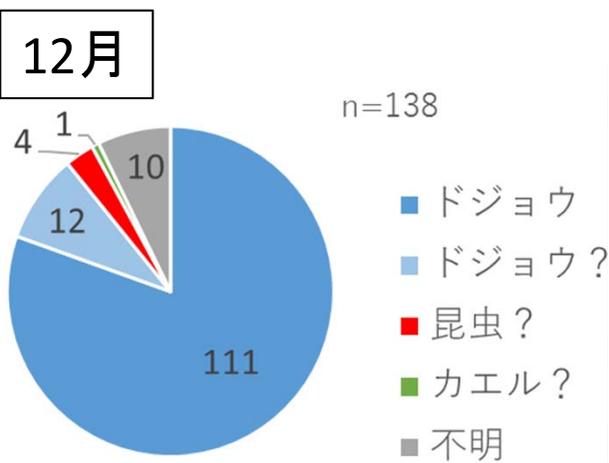
(4) コウノトリの飛来状況

コウノトリ調査結果概要

・採餌環境



餌の内訳(2017年9月6～8日)



餌の内訳(2017年12月1～3日)

9月調査、12月調査とも主要な餌はドジョウであった。

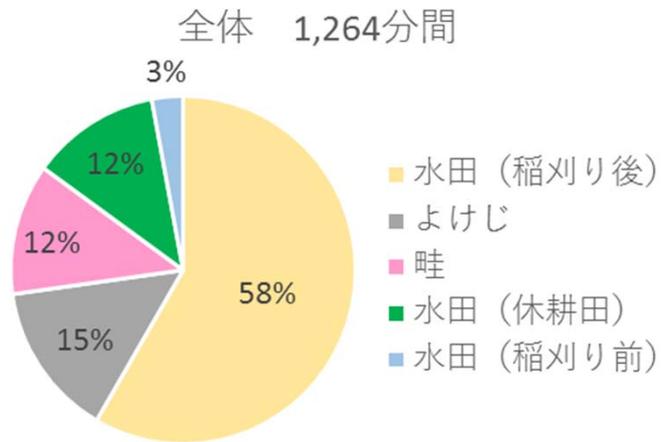
12月調査では餌を捉える際に枯れた稲など植物ごと啜ることが多く、不明な餌の割合が増加した。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(4) コウノトリの飛来状況

コウノトリ調査結果概要

・採餌環境



- ・水田（稲刈り後）を利用する時間が最も長く、よけじ、畦、水田（休耕田）、水田（稲刈り前）が続いた。
- ・採餌する稲刈り後の水田の多くに、稲刈り機の轍による水たまりが存在。
- ・採餌した稲刈り前の水田は稲が倒れている湛水水田であり、稲が伸びた水田での利用は確認されなかった。

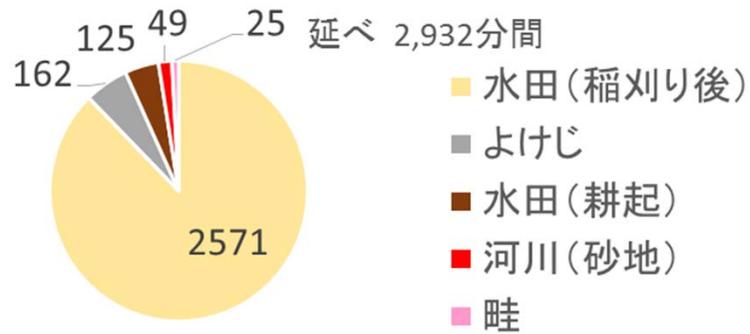
※「よけじ」とは、水田内に排水促進や用水を温める目的で掘られた溝。この溝には、入水前や落水後にも水が溜まっていることが多いため、さまざまな水生生物が水田に水がない時期の生息場所として利用している。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(4) コウノトリの飛来状況

コウノトリ調査結果概要

・採餌環境



- ・水田(稲刈り後)が最も多く、約88%を占めた。
- ・河川(赤川)での採餌も確認されたが、餌が獲れる割合は水田周辺と比較して小さかった。
- ・水田(稲刈り後)と水田(耕起)の採餌時間の比率は19:1であり、耕起していない水田を好むことが示唆される。
- ・水田では耕起の有無に関わらず浅い水溜まりがあるような湿潤の場所が好まれた。

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(5) 環境改善への取り組み事例

・水域・水系連続性の確保

- フナ類やタモロコ、ドジョウは水田を産卵場所として(ドジョウは越冬場所としても)利用。
 - カエルの仲間には、オタマジャクシ(幼体)の時期を水田で過ごし、成体はまわりの草地等へ移動するものがある。
- これらの水辺に依存する生物の視点に立った水域・水系の連続性を確保することにより、肉食性指標大型水鳥類の採食環境改善効果が期待できる。



非灌漑期は、水田内の水量が降水量に左右される

- 魚介類等の生息環境としては不安定

水路(排水路)護岸が垂直に近く、植生も見られない

- 登攀性の低いカエル(トノサマガエル等)が水田内外を行き来し辛く、一度水路に落ちると水田に戻るのが困難

水田と水路(排水路)の間に落差がある

- 魚介類の水路⇄水田間の行き来が困難なため、ドジョウやフナ等の、生活史の中で水田を利用する生物が生息し辛い
- 増水時に魚介類が水路から避難できる場所がない

非灌漑期(2015年12月)の斐伊川河口付近の水田・水路

指標大型水鳥類の近年の生息確認状況

(5) 環境改善への取り組み事例

・水域・水系連続性の確保

1. 水田内常時水域確保: 水田の一端に周年水のある区域(矢印部分。江、承水路、ヒヨセ等と呼ばれる)を用意し、水生生物が周年くらす場所にする



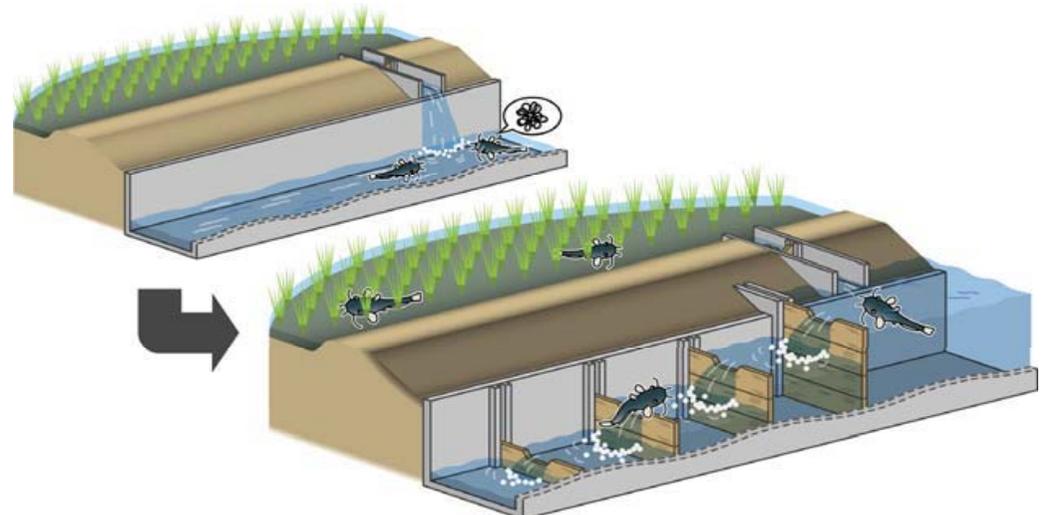
規模について、例えば新潟県佐渡市(「江」の設置を「朱鷺と暮らす郷づくり」認証制度の要件の一つ(選択)としている)では、幅30cm、深さ20cmの深溝(圃場整備のため深く掘れない水田では、幅50cm、深さ10cmでも可)を水田の短辺いっばいに整備することとしている。

※「乾田」での活用を想定した事例。水田によっては、凹部がある、地下水位が高い等の理由で小水域が周年形成されている等、より簡易な取組で、または何らかの取組を行わなくとも常時水域を確保できる場合がある。

2. 水田魚道の設置により、落差の生じた水路と水田の連続性を確保する



(滋賀県米原市長沢)



出典:「水田生態系の保全に視点をおいた整備技術の解説書」(農水省)より

・コウノトリの越冬に求められる配慮



「平成27年度中国・四国地方ナベヅル・マナヅル情報交換会」に参加しました

- 日時：平成28年2月15日(月) 13:00～17:00
- 場所：愛媛県西予市役所
- 参加者：約70名
- 主催：環境省

今季は過去20年間で最多となるナベヅルが四国内に滞在し、四万十市をはじめ愛媛県西予市など四国内を行き来していることが、日本野鳥の会や「四国ツル・コウノトリ保護ネットワーク」他の調べによって明らかになりました。

そこで、中四国6県のツル保護関係者や関係行政機関が現在の状況についての情報を共有し、今後地域でどのように取り組みを進めていくかについて考えることを目的とした会議が、環境省の主催により開催されました。

当会は、日本野鳥の会高知支部、中村河川国道事務所の方々とともにこの会議に参加し、これまでの活動を通じて考えられた問題点や課題を率直に会場に投げかけ、他地域からの助言を仰ぎました。

情報交換の結果、すべての飛来地において、理解のない人がツルに近づいてツルを驚かせてしまうことが、越冬を阻む最大の要因になっていることが明らかになり、その対策に関するノウハウを他地域の取り組みから学ぶことができました。

また、会議では、各飛来地での保護活動から一歩進んで、広域的な地域連携により、中国・四国地方をナベヅル・マナヅルの一大越冬地として確立させていくという方向性が示唆され、四万十市での私たちの取り組みの重要性を強く感じました。

《写真》※写真はクリックすると大きくなります。

上：情報交換会の様子

中：当会の活動報告の様子

下：会場には当会と協働して取り組んでいる国土交通省の「四万十川自然再生事業(ツルの里づくり)」の写真パネルも展示されました



出展：四万十つるの里づくりの会ウェブサイト